

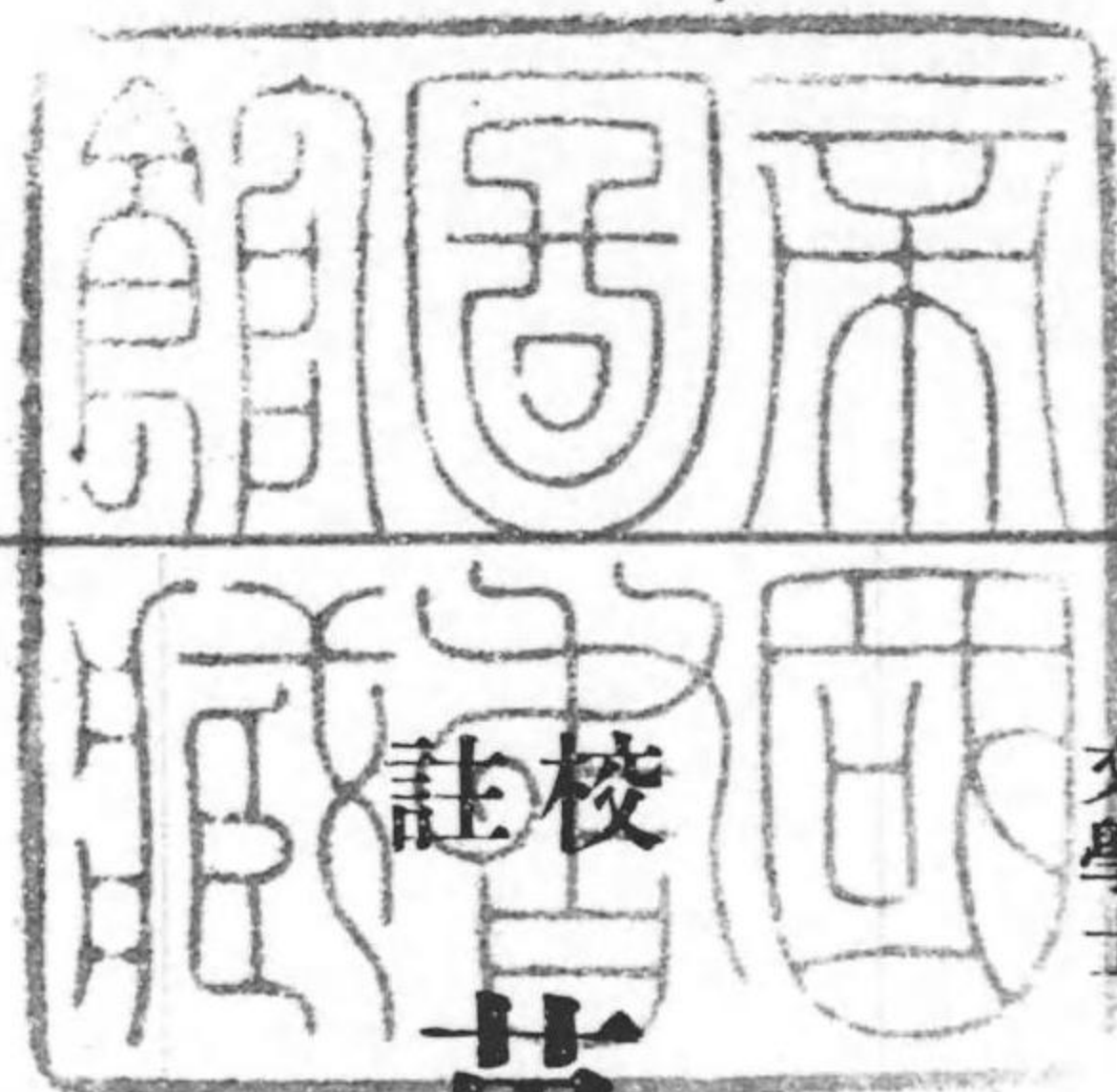
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

359
728

始



特202
1824



文學士

鈴木周作編

校註

芭

蕉

選

集

東京
白
帝
社





芭蕉の旅姿
(奥の細道の蕉村の挿繪に據る)

例言

- 一、本書は芭蕉の藝術と生活とを鑑味したい意圖の下に編纂した。
- 一、本書は紀行・日記・俳文・俳句・書簡等芭蕉の作品全般にわたりて、眞作と確信せらるるものから之を採擇した。但し卷末の「行脚の掟」と「祖翁口訣」との二篇は芭蕉自身の述作としては受取りかぬるが、芭蕉の旅即ち生活に對する用意と、藝術に對する態度とがよくわかるので參考として採録した。
- 一、本書の校合は古刊本を原據とし、之に諸家の近刊本をも參考して其の宜しきに従ひ、假名遣及漢字等にも改訂を加へたが慣用久しきものに就いては強ひて之を改めず、古き姿を存することとした。
- 一、本書卷頭の「芭蕉翁傳」は、芭蕉の研究者として有名な越前丸岡の簗笠庵梨一が、其の著「奥の細路菅菰抄」に附したもので、最も簡單に芭蕉の事歴を知るに便利だから、之を本文の前に載せて一讀に供することにした。

芭蕉翁傳

蓑笠庵梨一

一 同國上野の生れとの説もある。

祖翁は伊賀國柘植郷つげの産にして、彌兵衛宗清が末裔、柘植郷に宗清宅地の跡ありと云ふ。

は松尾半左衛門と云ふ。翁は次男にて、正保元年に生る。初の名は半七、後に忠左

衛門宗房と改む。世々の實名、元祖宗清の清の字を取るといふ。按ずるに、延寶以前の俳書には、多く名を宗房とする。桃青といひしは、東都下向の後な

るべ。國守藤堂家の同姓、同國上野の城士、藤堂新七郎良精の臣三となり、

夫より嫡子主計良忠俳名へ隨仕す。蟬吟子は洛の季吟に俳諧を學び申さ

る。故に翁もともに其の門に入りて、

いぬと申の世の中よかれ酉の年

と發句ありしは十四歳の時なりとぞ。明曆三年然るに蟬吟子は不幸にし

て寛文六年五の四月世を早うし給ふ。故に翁は君臣の因、風雅の縁、一方

ならぬ歎のあまり、遺骨を負ひて高野山に登り、報恩院に納めて、六月

二 家老の三家の一、祿五千石。

三 一般に近習、小姓と言はれて居るが、料理方であつたとの説も有る。

四 芭蕉は申年生れで、十四歳の時は酉年に當る。

五 時に年二十五歳芭蕉は二十三歳。

歸國、其の後ひそかに遁世の志ありてや、二君に仕へざる由を告げ、頻に暇を乞ひ申されしを、敢てゆるしなかりし故に、其の秋ならん、同僚城孫太夫といふ者の門に、短冊を粘して、

雲とへだつ友かや雁の生きわかれ

一「一書に「友かや」を「友にや」とあり。又雁の別れは秋季よりも春季と見るが妥當であるから、芭蕉の出奔も亦翌年の春でなかつたかといふ説もある。
二寛文十二年秋二十九歳の時江戸に下つてゐる。

と一句を残し、國を去りて此の時二十都に上り、季吟師のもとに遊學し、三と云ふ。其の後東武へ下向ありて、梨一かつて東都に遊ぶ間、本船町の中、八軒町と云ふ所の父も卜尺を俳句として、其の頃は世に知る人もありき、一年都へ上りし時に、芭蕉翁に出會ひて、東武へ伴ひ下り、しばしが程のたづきにと、縁を求めて水方の官吏とせしに、風人のならひ、俗事にうとく、其の任に勝へざる故に、やがて職をすてて深川といふ所に隠れ、俳語をもて世の業となし申されしと、父が物語を聞きぬと。此の時延寶六年にて年三十二といふ。或は一説に、本船町の長序令といふ者にさそはれて下り給ふとも云ふ。卜尺、序令ともに古き俳集に見えたり。或は兩名同人か。深川の六間堀といふ處

に庵をまうけ、天和二年まで在住ありしに、此の間七ヶ年、年三十九。其の冬、回祿の災にあひて、暫く甲州に赴き、彼の國にて年を越え、翌三年夏の末ならんか、深川の舊地へ歸り燒草の露を拂ひ、芭蕉一本を植ゑて、「芭蕉野分

して盟に雨を聞く夜かな」の吟あり。此の句よりして、住所を芭蕉庵と名づけ、人々も「ばせをの翁」とは稱しけるとぞ。翌年改元ありて貞享といふ。此の秋江都を旅立し、美濃・尾張より、此の時、年四十一、故に美濃にて、「薄に霜の髯四十一」と云ふ脇句あり伊勢路を経て、故郷の上野に年籠し、翌貞享二年の春も、なほ大和・難波・京師など經行し、野ざらし紀行是なり。此の夏また深川へ立ち歸り、同四年の秋まで住み申され、此の間に鹿島紀行あり。この冬再び上つ方へ首途あり。笈の小文紀行是なり。時に年四十四次の年、又元を改めて元祿と號す。此の年の八月末か、東國へ歸り、翌二年の春、北國行脚に赴き給ふ。奥の細道紀行これなり。時に年四十六。これより美濃・尾張・伊勢路を経て、大津に年を越え、翌三年の夏、石山の奥に幻住庵を結び四年の秋までここに隠れ、此の間に嵯峨日記あり。この秋この庵を出で、東武に下り同七年の秋、東都庵住三が年。また東都を旅立ち、東海道を経て、石山の幻住庵に暫く休らひ、京都などへ往來ありて、それより故郷伊賀へ立越え、奈良を経て、難波に逗留ある中に、病に犯され、十月十二日に世を去り給

一一九月二十六日門

人園女亭にて菌の馳走を受け以後數日饗宴が打續いて重食した爲、お腹の具合が悪かつたが、二十九日の夜から腹痛と共に下痢を起し、暫く道修町の之道亭に臥床してゐた。十月五日御堂前南久太郎町の花屋仁左衛門の裏座敷に移つて死んだ。今はたゞ花屋小路の名を存するのみだ。

ふ。年五十一なり。此の時の旅宿は、大阪御堂前、花屋仁左衛門と云ふ者の借家にて其の地主の家今猶存す。遺骸は江州松本の義仲寺に葬る。此の病中より終焉までの事は、其角が編める枯尾花集、支考が笈日記等に見えたる故にここに記さず。

右傳記は、伊賀上野の俳士、桐雨の筆記、桐雨は猿雖の曾孫にて、猿雖は翁の門人なり。加賀若松の僧、既白房の覺書を合せて是れをしるす。

芭蕉師を翁と稱することは、去來の旅寐序に、「むかし其角われに語りけるは、今度都に來り、師の名の高きことはいよく知り侍りぬ。同門の人々、師を尊みて翁といふのみにあらず、他門の人、我に向ひて翁々と稱す。まして季吟は師の師なり。其の子の湖春を先として、おきなといへり。然れば門人の憚るべきことにあらず。重ねて集を出さんには翁と書くべし」と云へりとあり。按ずるに、祖翁の古俳集に、武藏野と云ふあり。序は季吟の撰にて、其の詞に云ふ。「今は昔、追遙の翁と云ふ者あり。細川の流に和歌水を汲みながら、老のさざ波、高波を越えて、滑稽の島に逍遙して、遂に其の島守となりぬ。予ちなみに、島ぶりを問ふに、おきな答へて曰く、此の島は世界のまん中なれば、あまりに上手過ぐるをきらへり。」

蕉師を翁と稱することは、或は此の序文に始まるなるべし。時は天和

二年にて祖翁の春秋いまだ四十歳に満たず。さるを此の號を得給ふは、仰高の大徳、いよく尊むべし。

傳記畢

校註 芭蕉選集目次

甲子吟行	一
奥の細道	一三
笠張の説	一五
芭蕉を移す辭	一四
幻住庵の記	一五
嵯峨日記	一六
柴門の辭	一六
嵐蘭の誄	一六
書簡集	一七
俳諧猿蓑	一五
俳句集	一七
行脚の掟	一六
祖翁口訣	一七

——目次終——

校註芭蕉選集

甲子吟行

「千里に旅立ちて路糧をつつまず、三更月下無何に入る」といひけん、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を出づる程、風の聲そぞろ寒氣なり。

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせかへりて江戸をさす故郷

關越ゆる日は雨降りて、山みな雲に隠れけり。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

甲子吟行

一 一名、野ざらし紀行、又芭蕉翁道の記ともいふ。貞享元年八月より同年四月に亘る東海近畿地方の旅行記。
二 江湖風月集に「路不_レ齋_レ糧笑復歌、三更月下入_二無何_一、太平誰整_二閑戈_一、甲_一、三庫初無_二如_レ是刀_一」。
三 莊子、逍遙遊に「何不_レ樹_二之無何_一有之郷、廣莫之野_二。造化の自然無爲の境地にて一種の理想郷（ユートピア）。

四一賈島の詩に「客
舍（並川）已十霜、
歸心日夜憶（咸陽）、
無端更渡桑乾水、
却望（並州）是故
郷。」

何某千里といひけるは、此のたび路のたすけとなりて、萬いた
はり心を盡し侍る。常に莫逆の交ふかく、朋友に信あるかな此
の人。

五一箱根の關。
一粕谷氏、通稱油
屋喜左門、大和國
竹内村の人。

深川や芭蕉を富士に預け行く 千里

二源氏物語、桐壺
に、帝が幼き源氏
の君を案じて母北
の方に贈つた歌に
「宮城野のつゆ吹
き結ぶ風の音に小
萩がもを思ひこ
そやれ」。

富士川の邊を行くに、三つばかりなる捨子の哀げに泣くあり。
此の川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかり
の命まつ間と捨置きけん、小萩がもとの秋の風、こよひや散る
らん、翌（あす）や萎（し）れんと、袂より喰物投げて通るに、

三朗詠集に「巴猿
三叫曉、霜行人之
裳」。

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝父に悪まれたるか。母に疎まれたるか。父は汝
を悪むにあらじ。母は汝を疎むにあらじ。ただ是れ天にして、
汝が性の拙なきを泣け。大井川越ゆる日は、終日雨降りければ、

秋の日の雨江戸に指折らん大井河 千里

馬上の吟

一朗詠集に「松樹
千年終是朽、槿花
一日自爲樂」。

道のべの木槿は馬にくはれけり

二唐の詩人。字は
牧之、號は樊川、
世に杜甫に對して
小杜と稱す。杜牧
早行の詩に「垂鞭
信馬行、數里未
鶏鳴、林下帶殘夢、
葉飛時忽驚霜、凝
孤鶴過、月曉遠山
橫、僮僕休辭、
險、何時世路平」

二十日餘りの月かすかに見えて、山の根ぎはいと闇きに、馬上
に鞭を垂れて、數里いまだ鶏鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小
夜（なかや）の中山（なかつやま）に到りて忽ち驚く。

馬に寢て殘夢月遠し茶の煙

松葉屋風瀑が伊勢に有りけるを尋ね音信れて、十日ばかり足を
留む。暮れて外宮（けぐう）に詣で侍りけるに、一の鳥居の陰ほのぐらく、
御燈處々に見えて、また上もなき峰の松風、身にしむばかり深
き心を起して、

三十日月なし千とせの松をだく嵐

一「徒然草に「久米仙人は物洗ふ女の脛の白きを見て通を失ひ云々」。

腰間に寸鐵を帯びず、襟に一囊を懸けて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり。俗に似て髪なし。我僧にあらずといへども、鬢なきものは浮屠の屬にたぐへて、神前に入るをゆるさず。西行谷の麓に流あり。女共の芋洗ふを見るに、

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

其の日のかへさ、ある茶店に立寄りけるに、てふといひける女「あが名に發句せよ」と言ひて、白き絹出しけるに書付け侍る。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

閑人の茅舎をとひて、

蔦植ゑて竹四五本のあらし哉

長月の初故郷に歸りぬ。北堂の萱草も霜枯れ果てて、今は跡だになし。何事も昔にかはりて、はらからの鬢白く、眉皺よりて、

二「詩經、衛風伯兮篇に「焉得萱草言此心樹之背」背は北堂にて母の

居處。萱は萱と同じ。婦人此の花を帯ぶれば男子を産むと。

「ただ命有りて」とのみ言ひて言葉はなきに、兄の守袋をほどきて、「母の白髪をがめよ、浦島が子が玉手箱、汝が眉もや、老いたり。」と、しばらく泣きて、

手にとらば消えん泪ぞあつき秋の霜

大和の國に行脚して、葛城の郡竹の内と云ふ所にいたる。此處は例の千里が舊里なれば、日比とどまりて足を休む。藪より奥に家あり。

綿弓や琵琶に慰む竹のおく

二上山當麻寺に詣でて、庭上の松を見るに、凡そ千歳も經たるならん。大さ牛をかくすともいふべけん。かれ非情といへども、佛縁にひかれて、斧斤の罪を免がれたるぞ幸にして尊し。

僧朝顔いく死にかへる法の松

一「莊子、人間世に「匠石之齊見斲社樹其大蔽牛繫之百圍其高臨山之十仞是不材之木也無所可用故能若是之壽」。

獨吉野の奥に辿りけるに、まことに山深く白雲峯に重なり、煙
雨谷を埋めて、山賤やまがつの家所々にちひさく、西に木を伐る音東に
響き、院々の鐘の聲心の底にこたふ。昔より此の山に入りて世
を忘れたる人の、多くは詩に遁がれ、歌に隠る。いでや唐土の
廬山といはんも亦むべならずや。

ある坊に宿りて

礎打つて我に聞かせよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町ばかり分け入る
ほど、柴人の通ふ道のみわづかに有りて、嶮しき谷を隔てたる
いと尊し。彼のとくとくの清水は昔にはかはらずと見えて、今
もとくとくとく零落ちける。

露とくく心見に浮世すゝがばや

一 江西省に在る名山、香爐、五老峯等名勝多し。現今又避暑地として有名。

二 西行法師。

三 西行の歌に「とくくとおつる岩間の苔清水くみほすほどもなき住居かな」。

一 東方朔、三島記に「扶桑在碧海之中、樹者數千丈、徑三千圍、樹兩側同根偶生、更相依倚、是名扶桑」。支那人が我國を扶桑と稱するは此に本づく。王維が晁監を送る詩に「鄉國扶桑外、主人孤島中」。

二 父は孤竹君、弟は叔齊。亡父の意を體して家を弟に譲つてきかず、後又、周の不義を憤り其の粟を食ふを潔しとせず、首陽山に隠れて餓死した節義の士。

三 堯から天下を譲らうといふ話を聞いて、耳が汚れたとて潁川で耳を洗つたといふ、高潔恬淡な隱士。

もし是れ扶桑に伯夷二あらば、かならず口を漱がん。若しこれ許由三に告げば耳を洗はん。

山を登り坂を下るに、秋の日已に斜になれば、名ある所々見殘して後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を経てしのぶは何を忍草

大和より山城を経て近江路に入りて美濃に至るに、今須・山中を過ぎて、古への常盤四の塚あり。伊勢五の守武がいひける、義朝六殿に似たる秋風とは、いづれの處か似たりけん。我もまた、

義朝の心に似たりあきの風

不破

秋風や藪も畠も不破の關

大垣にとまりける夜は木因七が家があるじとす。武藏野を出でし

時、野ざらしを心に思ひて旅立ちければ、

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮

桑名本當寺にて、

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

草の枕に寝あきて、まだほの暗き中に、濱のかたへ出でて、

曙やしら魚白き事一寸

熱田に詣づ。社頭大いに破れ、築地は倒れて草むらに隠る。彼

處に繩を張りて、小社の跡をしるし、此處に石を据ゑて、其の

神と名のる。蓬・しのぶ心のまゝに生えたるぞ、なかなか目

出度きよりも心留りける。

しのぶさへ枯れて餅買ふやどり哉

名護屋に入る。道のほど諷吟す。

四 義朝の妻。
五 荒木田氏、伊勢内宮の神官。天文十八年七十七歿。
六 守武の獨吟千句に「義朝の心に似たる秋風」。
七 月見てや常盤の里へ歸るらん。
七 谷氏、通稱九太輔、美濃國大垣の人、享保十年八十歿。

一 熱田神宮、日本武尊を祀る。

一 竹齋物語に「山城國に蕪華師竹齋とてけうがる瘦法師一人有り、其身にまかせざりければ、おのづから心もまめならず、膚に淨衣を飾らねば、蕪華師とて人も呼ばず。されば、都にありても益なし云々」とて、にらみの介といふ郎等一人を連れて諸國を行脚し、到る處で狂歌を詠んでゐる。

狂句木がらしの身は竹齋に似たる哉

草枕犬も時雨る、か夜の聲

雪見にありきて、

市人よいでこれ賣らう雪の笠

旅人を見る、

馬をさへながむる雪の朝かな

海邊に日暮して、

海くれて鴨の聲ほのかに白し

爰に草鞋をとき、かしこに杖をすてて、旅寝ながらに年のくれ

ければ、

年くれぬ笠きて草鞋はきながら

といひくも山家に年を越して、

誰が聳ぞ齒朶に餅おふうしの年
奈良に出づる道のほど、

春なれや名もなき山の朝霞

二月堂に籠りて、

水とりやこもりの僧の沓の音
京に登りて三井秋風が鳴瀧の山家をとふ。

梅林

梅白し昨日や鶴をぬすまれし
檜の木の花にかまはぬすがたかな

伏見西岸寺任口上人に逢うて、

我衣にふしみの桃の雫せよ
大津に出づる道、山路を越えて、

一二月七日堂前の石井に、若狭國遠敷大明神より觀世音へ、獻せらるる水の湧き出るのを硯に汲みて、靈符を印す。朔日より七日迄行法がある。二京都の豪商、貞門の高瀬梅盛の門下。享保二年歿。三林和靖が梅と鶴とを愛した故事から三井秋風を暗に之に擬へたもの。圓機活法に「林逋(和靖)隱居孤山、常畜兩鶴、縱則飛

山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

辛崎の松は花よりおぼろにて
晝の休らひとて旅店に腰をかけて、

躑躅いけてその蔭に干鱈さく女

吟行

菜畠に花見顔なる雀かな

水口にて廿年を経て故人に逢ふ。

命一つ中に活けたる櫻かな

伊豆の國蛭が小島の桑門、これも去年の秋より行脚しけるに、
我が名を聞きて草の枕の道づれにもと、尾張の國まで跡を慕ひ
來たりければ、

四西岸寺の住職。如年と號す。初め貞門の季吟の門下であつたが後蕉風に變つた。

一伊賀上野の人、服部土芳、享保十五年七十四歿。

一 鎌倉圓覺寺の住職。幻呼と號す。其角の門人。貞亨二年歿。

二 南氏（或は坪井氏）尾張國名古屋の人、御藏米預なりしが事に由りて參河國伊良湖崎に隱る。萬菊丸と名告りて芭蕉の芳野紀行に従ふ。
三 林氏、尾張國熱田の人、正徳二年歿。

いざともに穂麥くらはん草枕
此の僧われに告げて曰く、圓覺寺大顛和尚、ことしむ月のはじめ、遷化し給ふよし。まことや夢の心地せらるゝに、まづ道より其角が方へ申遣しける。

梅戀ひて卯の花拜む泪かな

贈杜國子

白けしに羽もぐ蝶のかたみ哉

二度桐葉子のもとに有りて、今や東に下らんとするに、

牡丹薬ふかく分出る蜂の餘波哉

甲斐の國の山家に立寄りて、

行く駒の麥に慰むやどりかな

卯月のする庵に歸り、旅のつかれをはらす。

夏ころもいまだ風をとり盡さず

奥の細道

一 元祿二年三月二十七日曾良を伴うて奥羽より北陸を経て岐阜に出るまで、凡そ五百里百六十餘日の旅行。古歌に「跡たえぬたれに問はばやみちのくの思ひしのぶの奥の細道」と一説に奥の細道とは仙臺から鹽釜に出る街道とも、又仙臺附近の村名ともいふ。
二 李白、春夜宴桃李園序、「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若夢、爲歡幾何」。
三 李白は潯陽、杜甫は洞庭湖、西行は河内弘川寺、宗

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。舟の上
に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にし
て旅を栖とす。故人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よ
りか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、
去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひて、やや年も暮れ、春
立てる霞の空に、白川の關越えんと、そゞろ神の物につきて心
をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取る物手につかず、股
引の破れをつづり、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、
松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅

に移るに、

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

四―杉山市兵衛、屋
 號を鯉屋といひ、
 魚屋を業とし、芭
 蕉の有力な後援者
 享保十七年七八
 致。其の別荘を採
 茶庵といふ。
 一―俳諧を五十句或
 は百句懷紙に書く
 時、第一紙の表に
 八句を記す。之を
 表(精しくは初表)
 といふ。懷紙は柱
 に懸けるが常例。
 二―源氏物語、柏木
 に一月は有明にて
 光をさまれるもの
 から、かげさやか
 に見えて云々。
 三―貞和集に「三千
 里外有知己、鳴雁
 帶書招不來」
 四―陶淵明、歸田園
 居に「羈鳥戀舊
 林、池魚思故淵」

行く春や鳥啼き魚の目は泪
 これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立
 ち並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立

一―白樂天「去年九
 日到東洛、今年九
 日來吳鄉、兩邊蓬
 鬢一時白、三處菊
 花同色黃」。
 二―草加、千住の北
 二里餘、奥州街道
 第二の宿驛。
 三―富士山麓大宮町
 の淺間神社に祭ら
 る。

ちて、吳天に白髮のを恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目
 に見ぬ境、もし生きてかへらばと定めなき頼みの未をかけ、其
 の日漸う早加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれ
 る物まづ苦しむ。たゞ身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣
 は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨筆のたぐひ、或はさり難き錢な
 どしたるは、さすがに打捨て難くて、路次のわずらひとなれる
 こそわりなけれ。

室の八島に詣づ。同行曾良が曰く、此の神は木花咲耶姫の神と申して、富士一體なり。無戸
 室に入りて焼け給ふ誓のみ中に火々出見の尊生れ給ひしより、室の八島と申す。又煙をよみ習
 はし侍るもこの謂れなり。將このしろといふ魚を禁ず。縁記の旨世につたふ事も侍りし。

三十日日光山の麓に泊る。主の云ひけるやう、我名を佛五左
 衛門といふ。よろづ正直を旨とする故に人かくは申し侍るまゝ、
 一夜の草の枕もうちとけて休み給へといふ。いかなる佛の濁世

一論語、子路篇に「剛毅木訥近仁」。

塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやと、主のなすことに心をとめて見るに、たゞ無智無分別にして正直偏固のものなり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。

卯月朔日御山に詣拜す。往昔此の御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今この御光一天にかがやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖穩かなり。猶憚多くて筆をさし置きぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

二日光山の主峰男體山。

黒髪山は、霞かゝりて雪いまだ白し。

剃りすてゝくろかみ山に衣更 曾良

三もと岩波庄左

曾良は河井氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべ

門正字、信濃下諏訪の人、壯年伊勢長島藩に仕へたが浪人して江戸に出づ。寶永六年六十ニ歿。

一李白、望廬山瀑布、「飛流直下三千尺」。

二夏行又安居ともいふ。夏九旬陰曆四月十六日より七月十六日まで。誦室に安居し酒肉を斷ち(夏斷)誦經(夏經)寫經(夏書)等をする。夏行に入るを結夏、終るを解夏といふ。

三下野國那須郡にて東西六七里南北十里餘の廣大な平原。

四浄法寺圖書。

て、予が薪水の勞を助く。このたび松島・象潟の眺め共にせんことを悦び、かつは驛旅の難をいたはらんと、旅だつ曉髪を剃りて墨染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍つて黒髪山の句有り。衣更の二字力ありて聞ゆ。

二十餘町山を登つて瀧あり。岩洞の頂より飛流し百尺、千岩の碧潭におちたり。岩窟に身をひそめ入りて瀧の裏より見れば、裏見の瀧と申し傳へ侍るなり。

暫時は瀧に籠るや夏の初め

那須の黒羽といふ所に知る人あれば、これより野越にかゝりて直道を行かんとす。遙に一村を見かけて行く。雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中に行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこに歎きよれば、野夫といへどもさ

すがに情しらぬにはあらず。「如何すべきや、されども此の野は縦横にわかれて、うひくしき旅人の道ふみたがへん、怪しう侍れば、此の馬のとどまる處にて馬を返し給へ。」と貸し侍りぬ。ちいさき者ふたり、馬の跡したひて走る。一人は小姫にて名をかさねと云ふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし 曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍壺に結びつけて馬を返しぬ。

黒羽の館代、淨坊寺何がしの方に音づる。思ひかけぬ主の悦び、日夜語りつゞけて、其の弟桃翠などいふが朝夕勤めとぶらひ、自らの家にも伴ひて、親屬の方にも招かれ、日を経るまゝに、ひと日郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し、那須の篠原を分けて玉藻の前の古墳をとふ。夫より八幡宮に詣づ。與市扇の的を射し時、別しては我が國氏神正八幡と誓ひしも此の神社にて侍ると聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。暮るれば桃翠が宅に歸る。

修驗光明寺といふあり。そこに招かれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途哉

- 一 圖書高勝。俳號桃雪。
- 二 鹿子知善太夫。豊明。俳號翠桃。桃翠は誤記。
- 三 三國渡來の金毛九尾の妖狐の化けて美女となりしもの。
- 四 修驗道の開祖役の小角(持統・文武御代)の像を安置した。一枚齒の大きな足駄を穿いてゐる。

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚山居の跡あり。

たてよこの五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩にかきつけ侍りと、いつぞや聞え給ふ。其の跡見んと雲岸寺に杖をひけば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人多く道の程うちさわぎで、覺えずかの麓に至る。山は奥あるけしきにて、谷道遙に松杉黒く苔したりして、卯月の天いま猶寒し。十景つくる所、橋を渡つて山門に入る。

扱かの跡はいづくの程にやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見るが如し。

木啄も庵はやぶらず夏木立

- 一 常陸國鹿島根本寺の僧、後江戸深川長慶寺に住んだこともある。芭蕉が參禪の師で、正徳五年八十七寂。
- 二 雲岸寺岸は正しくは巖。
- 三 雲巖寺に十景五橋三水の勝景がある。十景は玲瓏岩、水分石、飛雪亭、玉几峯、鉢盂峯、龍雪洞、十梅林、海岸閣、竹林塔、千丈岩。
- 四 南宋の高僧。死關はその座禪した洞窟の稱にて、出でざること十五年に及んだ。
- 五 梁の高僧。庵を孤巖に結び、終日論談して倦むを知らなかつたといふ。

と、取りあへぬ一句を柱に残し侍りし。

是より殺生石に行く。館代より馬にて送らる。此の口付のを
のこ短冊得させよと乞ふ。やさしき事を望み侍るものかなと、

野を横に馬引きむけよほとゝぎす

一 那須温泉、湯本
にある。其處に温
泉神社（温泉大明
神）もある。
二 西行、新古今集
に、「道のべに清
水流るゝ柳蔭しば
しとてこそ立ち止
りつれ」。
三 平兼盛、拾遺集
に「たよりあらば
いかで都へ告げや
らん今日白川の關
は越えぬと」。

殺生石は温泉の出づる山陰にあり。石の毒氣いまだ滅びず、蜂
蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほど重なり死す。又清水ながるゝ
の柳は、蘆野の里に有りて田の畔にのこる。此の所の郡守戸部
某の、此の柳みせばやなど折々にの給ひ聞え給ふを、いづくの
程にやと思ひしを、今日此の柳の蔭にこそ立ちより侍りつれ。

田一枚うゑて立ちさる柳かな

心もとなき日數かさなるまゝに、白川の關にかゝりて旅心定
りぬ。いかで都へとたより求めしもことわりなり。中にも此の

一 念珠（貝）、白河、
勿來を東國の三關
といふ。
二 能因、後拾遺集
に「都をば霞と共
に立ちしかど秋風
ぞ吹く白河の關」。
三 源頼政、千載集
に「都にはまだ青
葉にて見しかども
紅葉散りしく白河
の關」。
四 藤原清輔の袋草
子に、竹田大夫國
行白川の關過ぐる
時特に裝束を改む
人その故を問へば
能因の秋風ぞ吹く
と詠める所をいか
で常服にて過ぎん
やと答へたことが
見える。
五 磐梯山。
六 相築（相良）伊
左衛門。須賀川宿
の驛長。

關は三關の一にして、風騒の人心をとゞむ。秋風を耳にのこし
紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に茨の
花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝
を改めし事など、清輔の筆にとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着哉 曾良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川をわたる。左に會津根
高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸下野の地をさかひて山
つらなる。影沼といふ所を行くに、けふは空くもりて物影うつ
らず。須賀川の驛に等躬といふ者を尋ねて、四五日とゞめらる。
先づ白川の關いかに越えつるやと問ふ。長途の苦しみ身心つか
れ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかしくしう
思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植歌

無下に越えんもさすがにと語れば、脇・第三とつゞけて三卷となしぬ。

此の宿しゆくの傍に、大なる栗の木蔭をたのみて、世をいとふ僧あり。椽せんひろふ太山みやまもかくやと閒まごろに覺えられて、物に書きつけ侍る。其の詞、

栗といふ文字は、西の木と書きて西方淨土にたより

ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此の木を用ひ

給ふとかや。

世の人のみつけぬ花や軒の栗

等躬が宅を出でて五里ばかり、檜皮ひはだの宿をはなれて淺香山あり。路より近し。此のあたり沼多し。かつみ刈る比もや、近う

一可伸、號は栗齋
二西行、山家集に「山深み岩にせかるゝ水ためんつかく落つる椽拾ふほど」。杜甫、乾元中寓居同谷縣歌「一歲拾椽栗隨狙公、天寒日暮山谷裏」。
三今の日和田村、古名安積の宿。
四眞菰の異名、古今集に「みちのくの淺香の沼の花かつみかつ見る人に戀ひやわたらん」。一「花かつみ」までは「かつ見る」の序詞。

一アイヌの穴居の跡だらう。平兼盛拾遺集に「陸奥の安達が原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか」。

二福島より一里。

松川の南岸今の五部いぶの渡し。

三世々信夫郡を領してゐた。繼信忠の父で、泰衡を助けて源頼朝の軍と戦つたが敗死した。

四飯坂の誤か。今の飯坂温泉場。

なれば、いづれの草を、花がつみとはいふぞ、人々に尋ね侍れど、更に知る人なし。沼をたづね人にとひ、かつみくくと尋ね歩ききて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福島にやどる。明くれば、しのおもぢ摺の石をたづねて忍ぶの里に行く。遙か山陰の小里に、石なかば土に埋れてあり。里の童部わらはべの來りて教へける、「昔は此の山の上に侍りしを、往來の人の麥草をあらして此の石を試み侍るをにくみて、此の谷につき落せば、石の面下さまに伏したり。」といふ。さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪の渡を越えて、瀬せの上うへといふ宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は、左の山ぎは一里半ばかりに有り。飯塚の里鯖野と聞きて、

一 飯坂の西半里。佐藤庄司元治の大島城址といふ。
 二 瑠璃光山、醫王寺。眞言宗。
 三 繼信、忠信は義經に従つて京都に攻め上つたが二人とも戦死して他國の土となつたのを母が悲み歎くので二人の妻甲冑を着て夫に擬し、老母を慰めたと云ふ。其の頃の人此の二人の婦人の孝心に感じ之を木像に刻んで同寺の境内の甲冑堂に安置した。
 四 晉書羊祜傳に「祜卒、襄陽百姓於峴山祜平生游憩之所、建碑立廟、歲饗祭焉、望其碑者莫不流涕、杜預因名爲啜淚碑。」

尋ねく行くに、丸山といふに尋ねあたる。これ庄句が舊館なり。麓に大手の跡など人のをしふるに任せて泪をおとし、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし先づ哀なり。女なれどもかひなくしき名の世に聞えつるものかなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば、こゝに義經の太刀、辨慶が笈をとめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日の事なり。其の夜飯塚にとまる。温泉あれば、湯に入りて宿をかるに、土座に蓆を敷きて、あやしき貧家なり。灯もなければ、圍爐裏の火かげに寐所をまうけて臥す。夜に入りて、雷鳴り、雨しきりに降りて、臥せる上より漏り、蚤・蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこりて、消え入るばかりになん。短夜

一 岩代より磐城に入る關門。伊達の關ともいふ。
 二 笠島は名取郡にある地名で、郡名ではない。
 三 左遷されて陸奥へ下向の途中。笠島道祖神の前を下馬せずして通りし爲落馬して死んだ四 西行、新古今集に「朽ちもせぬその名ばかりを留めおきて枯野の薄形見にぞ見る」。

の空もやうく明くれば、又旅立ちぬ。猶夜の餘波こゝろ進まず。馬かりて桑折の驛に出づる。遙なる行末をかへてかゝる病覺束なしといへど、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是れ天の命なりと、氣力聊かとり直し、路縦横にふんで伊達の大木戸を越す。鎧摺・白石の城を過ぎ、笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくの程ならんと人にとへば、「これよりはるか右に見ゆる山ぎはの里を蓑輪・笠島といふ。道祖神の社、かたみの薄今にあり。」と教ふ。此の頃の五月雨に道いと悪しく、身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過ぐるに、蓑輪・笠島も五月雨の折にふれたりと、笠島はいづこ五月のぬかり道岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目さむる心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずと知らる。先づ能因法師思ひ出づ。往昔陸奥の守にて下りし人、此の木を伐りて名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此のたび跡もなしとは詠みたり。代々あるは伐りあるは植ゑつぎなどせしと聞くに、今はた千歳の形と、のほひて、めでたき松のけしきになん侍りし。

武隈の松みせ申せ遅ざくらと、學白といふもの、餞別したりければ、

櫻より松は二木を三月ごし、

- 一 草壁氏。芭蕉の門人。江戸住。
- 二 嘉右衛門(加は略記)畫號四鶴、貞門の俳人。
- 三 仙臺の東郊の原で萩の名所。
- 四 玉田は仙臺の東北郊、横野は其の東接地、躑躅が岡は仙臺と宮城野との中間。
- 五 古今集、東歌に「み侍み傘と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」。

名取川を渡りて仙臺に入る。あやめ茸く日なり。旅宿を求めて四五日逗留す。こゝに畫工加右衛門といふ者あり。聊か心あるものと聞きて知る人になる。此の者、年比さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋のけしき思ひやる。玉田・横野・躑躅が岡はあせび咲く頃なり。日影も漏らぬ松の林に入りて、こゝを木の下といふとぞ。むかしもかく露深ければこそ、みさぶらひみかさと詠

- 一 宮城野の南方。薬師堂こゝにある
- 二 躑躅が岡の東の岡にある。

みたれ。薬師堂・天神の御社など拜みて、其の日はくれぬ。猶松島・鹽竈の所々畫にかきて送る。かつ紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、こゝに至りてその實をあらはす。

あやめ草足に結ばんわらぢの緒

かの畫圖に任せてたどり行けば、奥の細道の山際に十符の菅あり。今も年年十符の菅菰を調へて國守に獻ずといへり。

壺碑 市川村多賀城に有り

- 三 仙臺より鹽竈方面へ行く道。
- 四 十ふは十編の意。編糸の十筋ある菅菰。古來この邊の名産。
- 五 壺の碑は、坂上田村麿(實は文屋綿麻呂)が陸奥七戸の北なる壺村に建てたもので、こゝのは多賀城碑であるから、昔から混同してゐる。又多賀城碑は後世の偽造との説もある。
- 六 朝獨の朝を脱す

つぼのいしぶみは、高さ六尺餘、横三尺ばかりか。苔をうがちて文字幽かなり。四維國界の里數をしるす。此城、神龜元年、按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年、參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣獨修造也。十二月と有り。聖武皇帝

一 鹽竈の南にて多賀城址附近。
 二 二條院讚岐、千歳集に「わが戀は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし」。
 三 古今集、東歌、「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなん」。「ちぎりきなかたみにそでをしほりつゝ末の松山波こさじとは」。

四 白樂天、長恨歌に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」。
 五 古今集、東歌、みちのくはいづくはあれど鹽釜の浦こぐ舟の綱手かなしも」。

の御時にあたれり。昔よりよみ置ける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて道改まり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じて、其の跡たしかならぬ事のみを、こゝに至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱す。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、泪も落つるばかりなり。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて末松山といふ。松のあひくゝみな墓原にて、羽をかはし枝を連ぬるちぎりの末も、終はかくの如きと悲しさもまさりて、鹽竈の浦に入相の鐘を聞く。五月雨の空聊か晴れて、夕月夜かすかに、籬が島もほど近し。蟹の小舟こぎつれて、肴分つ聲々に、つなでかなしもと詠みけん心もしられて、いとゞ哀なり。その

一 奥州地方に傳はる一種の淨瑠璃。この頃はまだ三味線は無く、扇子で拍子をとつた。
 二 平家琵琶の略。
 三 幸若舞。舞々ともいふ。
 四 伊達政宗。慶長十二年修造。

五 秀衡の三男、藤原忠衡。父の遺命を守つて義經に味方し、兄泰衡に殺さる。
 六 武經七書六韜に「勵道可操義名亦從之」の句が出てゐることだが（菅菰抄）見當らない。出典未詳。

夜目盲法師の琵琶をならして、奥淨瑠璃といふ物を語る。平家にもあらず、舞にもあらず、鄙びたる調子うちあげて、枕近うかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えられる。早朝鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仞にかさなり、朝日朱の玉垣を輝かす。かゝる道のはて、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ吾が國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寶燈有り。かねの戸びらの面に、「文治三年和泉三郎寄進」とあり。五百年來の俤、今日のみまへに浮びてそゞろに珍らし。渠は勇義忠孝の士なり。佳名今に至りて慕はずといふ事なし。誠に人能く道を勤め義を守るべし、名も亦是にしたがふといへり。日既に午に近し。舟をかりて松島に渡る。其の間二里餘、雄島

の磯につく。

抑も事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、歎つものは天を指し、伏すものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重に疊みて、左にわかれ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛すがごとし。松の縁こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから矯めたるが如し。其の氣色窅然^{えうぜん}として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神の昔、^三大山祇のなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有り。はた松の木蔭に世をいとふ人もまれ

- 一 杜甫望嶽に「諸峰羅立似兒孫」。
- 二 東坡西湖の詩に「若把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜」。
- 三 山を司る神。
- 四 京都妙心寺の僧寛永十三年伊達忠宗に聘せられて、瑞巖寺の中興となつた。
- 五 把不住軒といへる亭。

- 一 山口氏、名は信章、甲斐國甲府の人、詩を善くし、又俳諧を好む。享保元年七十五歿。
- 二 醫者、歌を詠み江戸深川に住む。
- 三 松か浦島は松島とは別で、末の松山の東北方の海濱一帯の稱。此處では松島を指したものか。
- 四 中川甚五兵衛、美濃國大垣の人。
- 五 僧石法身。入宋して無準禪師に學び、歸朝後、最明寺時頼の命を受けて此の寺の住持となつた。
- 六 禪宗にては、三門、佛殿、法堂、僧堂、庫裡、浴室、東司。

く見え侍りて、落穂・松笠など打烟^{うちけぶ}りたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら先づ懐かしく、立ちよるほどに、月海にうつりて、晝のながめ又改む。江上にかへりて宿を求むれば、窓をひらき、二階をつくりて、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれ時鳥曾良

予は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊廬をわかるる時、素堂松島の詩有り、原安適松^三が浦島の和歌を贈らる。袋を解いてこよひの友とす。且つ杉風・濁子^四が發句あり。

十一日瑞岩寺に詣づ。當時三十二世のむかし、眞壁^五の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其の後に雲居禪師の徳化によりて、七堂^六葺改りて、金碧莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍

とはなりける。彼の見佛聖の寺はいづくにやと慕はる。

十二日、平泉と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡まれに、雉兔菟蕘の行きかふ道そこともわかず、終に道踏みたがへて石の卷といふ湊に出づ。こがね花さくと詠みて奉りたる金華山海上に見渡し、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて、竈の煙立ちつゞけたり。思ひかけず斯る所にも來れる哉と、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道まよひ行く。袖の渡り、尾ぶちの牧、眞野の萱原などよそ目に見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して平泉に至る。その間二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門のあとは一里こなたにあり。

一 鳥羽帝の御宇の人。庵を雄島に結びて苦行十二年、法華經を六萬遍讀誦したといふ。
二 孟子、梁惠王下「文王之囿方七十里、菑蕘者往焉、雉兔者往焉」。
三 萬葉集、家持、すめろぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山に黄金花咲く。

四 三代は藤原清衡基衡、秀衡。
一 秀衡の次男、頼朝の爲に義經を殺したが己亦頼朝に殺さる。
二 杜甫、春望に「國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心云々」。

秀衡が跡は田野に成りて、金鷄山のみ形を残す。先づ高館たかだてにのぼれば、北上川南部より流る、大河なり。衣川は和泉が城じやうをめぐりて、高館の下にて大河に落入る。秦衡等が舊跡は、衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷えまを防ぐと見えたり。儲も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛哉 曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂ひかりは三代の棺ひつぎを納め、三尊さんそんの佛を安置す。七寶散りうせて、珠の屏風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢とな

三 長明の無名抄に俊頼、卯の花の皆白髪とも見ゆるかな賤が垣根もとよりにけり。兼房は義經没落の時、髪振亂して奮戦し討死した。
四 阿彌陀三尊にて阿彌陀如來(中央)勢至菩薩(左)觀世音菩薩(右)。

一 正應元年、鎌倉將軍惟康親王、金色堂に鞘堂を造つて之を保護した。

るべきを、四面新に圍んで、藁を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千載の記念とはなれり。

五月雨のふりのこしてや光堂

南部道遙に見やりて、岩手の里に泊る。小黑崎、みつの小島を過ぎて、鳴子の湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす。此の道旅人まれなる處なれば、關守にあやしめられて、漸として關を越す。大山を登つて日すでに暮れければ、封人の家のみかけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

二 鳴子より羽前へ越ゆる中山越をいふ。尿前越とも云ふ。

蚤虱馬の尿する枕もと

主の云ふ、是より出羽國に大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて人

一 王安石、鍾山即事に「茅簷相對坐終日、一鳥不鳴山更幽。」
二 杜甫、鄭駙馬潛曜宴洞中「已入風磴一羣雲端。」
三 最上郡の新庄を指す。

を頼み侍れば、究竟の若者、反脇差をよこたへ、櫛の杖を携へて、我々が先に立ちて行く。けふこそ必ず危き目にも逢ふべき日なれと、辛き思ひなして後について行く。主の云ふにたがはず、高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて夜行くが如し。雲端に土ふる心地して、篠の中踏み分けく、水をわたり岩に蹴きて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう、「此の道必ず不用の事あり、恙なう送りまゐらせて仕合したり」と、悦びて別れぬ。あとに聞きてさへ胸とゞろくのみなり。

四 芭蕉の門人、鈴木八右衛門、鳥田屋といふ。紅花間屋にて富豪。

尾花澤にて清風と云ふ者を尋ぬ。彼は富める者なれども、志いやしからず。都にも折々通ひて、さすがに旅の情をも知りたれば、日比とゞめて、長途のいたはりさまぐくにもてなし侍る。

涼しさを我が宿にしてねまる也

這出でよかひ屋が下の蟾ひきの聲

眉まゆ掃はきを佛にして紅粉べにの花

蠶飼する人は古代のすがた哉 曾良

山形領に立石寺りつしゃくじといふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に

清閑の地なり。一見すべきよし人々の勸むるによつて、尾花澤

より取つてかへし、其の間七里ばかりなり。日いまだ暮れず、

麓の坊に宿かり置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山と

し、松柏年ふり、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて

物の音聞えず。岸をめぐり岩を這うて佛閣を拜し、佳景寂寞と

して心すみ行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

一僧圓仁。最澄に
學び入唐す。天臺
座主となり貞觀六
年七十一寂。

一胡人の吹く蘆
笛。

最上川乗らんと、大石田おほいしだと云ふ所に日和を待つ。こゝに古き

俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔をしたひ、蘆角あしかく一聲の心をや

はらげ、此の道にさぐり足して、新古ふた道に踏み迷ふといへ

ども道しるべする人しなればと、わりなき一卷を残しぬ。此

の度の風流こゝに至れり。

最上川はみちのくより出で、山形を水上みなかみとす。碁點ごてん・隼はやぶさな

どいふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、はては酒田

の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稻積み

たるをやいな舟ふねといふならし。白絲の瀧は青葉のひまゝひまに落

ちて、仙人掌岸に臨みて立つ。水漲つて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日羽黒山にのぼる。岡司左吉三といふ者を尋ねて、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別

二古今集、東歌に
「最上川のほれば
くだる稻舟のいな
にはあらずこの月
ばかり」。

三芭蕉の門人、呂
丸又露丸ともい
ふ。羽黒山麓の手
向町の人。

院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日本坊において俳諧興行。

有りがたや雪をかをらす南谷

五日權現に詣づ。當山開關能除大師は、いづれの代の人といふことを知らず。延喜式に羽州里山の神社とあり。書寫、黒の字を里山となせるにや、羽州黒山を中略して羽黒山といふにや。出羽といへるも鳥の毛羽を此の國の貢に獻ると風土記に侍るとやらん。月山、湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯かゞげそひて、僧坊棟をならべ、修驗行法を上げまし、靈山靈地の驗效、人貴び且つ恐る。繁榮長へにして、めでたき御山と謂つべし。

八日月山くわつざんに登る。木綿くわふしめ身に引きかけ、寶冠に頭を包み、強力といふものに導かれて、雲霧、山氣の中に氷雪を踏んで登る事八里、更に日月行道の雲關に入るかとあやしまれ、息絶え身こぶえて、頂上に臻れば、日没して月顯はる。笹を敷き篠を枕として、臥して明くるを待つ。日出で、雲消ゆれば、湯殿に下る。

- 一 刀工月山。建久頃の人と傳ふ。
- 二 晋太康地理記、「汝南西平縣有龍淵水、可三用三泮三。又劍二特堅利一。龍淵又龍泉といふ。
- 三 禪林句集、「雪裏芭蕉摩詰畫、炎天梅葉簡齋詩」
- 四 金葉集「諸共にあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」。

谷の傍に鍛冶小屋といふあり。此の國の鍛冶靈水を選びて、こゝに潔齋して劍を打つ。終に月山と銘を切つて世に賞せらる。彼の龍泉に劍を淬ちぐとかや。干將、莫耶の昔を慕ふ、道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばし休らふほど、三尺ばかりなる櫻の蕾半ば開けるあり。降りつむ雪の下に埋れて、春をわすれぬ遅櫻の花の心わりなし。炎天三の梅花こゝに薫るがごとし。行尊僧正の歌の哀れもこゝに思ひ出で、猶まさりて覺ゆ。すべて此の山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍つて筆をとめて記さず。坊にかへれば、阿闍梨の需に依つて、三山順禮の句々短冊に書く。

涼しさやほの三日月の羽黒山やま
雲の峰幾つくづれて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

曾良

湯殿山ヤマ錢ふむ道の泪かな

羽黒を立つて、鶴が岡の城下長山氏重行といふ武士の家にむかへられて、誹諧一卷あり。左吉も共に送りぬ。川舟につて酒田の湊に下る。淵庵不玉といふ醫師の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
暑き日を海に入れたり最上川

一 與右衛門恒行、
鶴岡酒井候の臣、
俳號重行。

二 伊藤玄順、酒井
候の師、淵庵は
落淵庵の略。

三 莫作は模索に同
じ。

江山・水陸の風光敷を盡して、今象潟に方寸をせむ。酒田の湊より東北の方、山をこえ磯を傳ひいさごを踏みて、其の際十里、日影や、傾ぶく比、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海かの山かくる。闇中に莫作もさくして、雨も又奇なりとせば雨後の晴色又たのもしと、蟹の苦屋に膝を入れて雨の晴るゝを待つ。其の朝、天よく霽れて、朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮ぶ。先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶら

一 西行の歌と傳へ
るに、「象潟の櫻
は波に埋もれて花
の上こぐ蟹の釣
舟」。

二 一うやむやの關と
もいふ。陸奥から
出羽に通ずる有名
な關也。

三 越より吳王夫差
に獻じた美人。吳
はこの爲に國を亡
ぼす。蘇東坡西湖
の詩に、「水光潑
灑晴偏好、山色空
濛雨亦奇、若把西
湖比西子、淡粧濃
抹總相宜」。西
子は西施のこと。

ひ、むかふの岸に舟をあがれば、「花の上こぐ」とよまれし櫻の老木、西行法師の記念を残す。江上に御陵あり、神功后宮の御墓といふ。寺を于滿珠寺といふ。此處に行幸ありし事いまだ聞かず。いかなる事にや。此の寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の影うつりて江にあり。西にむやくの關路をかぎり、東に堤を築きて秋田にかよふ道遙かに、海北に構へて浪うち入るゝ所を汐ごしといふ。江の縦横一里ばかり、佛松島にかよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟は怨むがごとし。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟の雨に西施がねぶの花
汐越や鶴脛ぬれて海すゞし

祭禮

象がたや料理何くふ神まつり
曾良
美濃國の商人
蟹の家や戸板を敷きて夕すゞみ
低耳

岩上に雉鳩うさぎの巢を見る

浪こえぬ契ありてやみさごの巢
曾良

一 出羽と越後の境の念珠が關。

酒田の餘波日をかさねて、北陸道の雲に望む。遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百二十里と聞く。鼠ねずの關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國市振いちぢりの關にいたる。此の間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病發りて事を記さず。

二 市振までの間に

是等の三難所あり
東より順に云へば
犬もどり・駒がへ
し・親知らず子知
らず。略して親子知

文月や六日も常の夜には似ず
荒海や佐渡に横たふ天の河
今日は親知らず子知らず・犬もどり・駒がへしなどいふ北國

一 新古今集雜に「白波の寄する渚に世をつくす蟹の子なれば宿も定めず」

一の難所をこえて疲れ侍れば、枕引きよせて寐たるに、一間隔て、表おもての方に、若き女の聲二人ばかりと聞ゆ。年老いたるをこの聲も交りて物語するを聞けば、越後の國新潟といふ所の遊女なりし。伊勢參宮するとして、此の關までをこの送りて、あすは故郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやるなり。「白波一のよする汀に身をはふらかし、蟹の子の世をあさましよう下りて、定めなき契日々の業ごといん困いかにつたなし」と、物いふを聞くく寐入りて、あした旅立つに、我々に向ひて、「行方知らぬ旅路のうさ、餘り覺束なうかなしく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍らん、衣のうへの御情に、大慈のめぐみをたれて結縁けちんさせ給へ」と涙を落す。「不便の事には侍れども我々は所所にてとゞまる方多し、只人の行くに任せて行くべし、神明

の加護必ず恙なかるべし」と云ひすて、出でつ。哀れさ暫らく止まざりけらし。

一家ひとつやに遊女もねたり萩と月

曾良に話れば書きとゞめ侍る。

一 萬葉集に「多古の浦の底さへにはほふ藤浪をかざして行かん見ぬ人のためし。」

黒部四十八か瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、那古といふ浦に出づ。擔籠かごの藤浪は春ならずとも、初秋の哀れとふべきものと、人に尋ねれば、これより五里磯つたひしてむかふの山陰に入り、蚤の苦ふきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじと云ひおどされて、加賀の國に入る。

早稲の香や分け入る右は有磯海

二 越中から俱利伽羅峠にかかれば左方にある山。

三 平家が源氏の爲め攻め落された有名な谷。

四 姓氏未詳。何處姓名不詳。猿義その他に句出づ。

卯の花山ニ・くりからが谷を越えて、金澤は七月中の五日なり。爰ニに大阪よりかよふ商人何處かしよといふ者あり。それが旅宿を俱ニす。

一笑といふ者は、此の道にすける名のほのく聞えて、世に

五 小杉氏。高瀬梅盛門下であつたが蕉門に歸す。三十六歳歿。

一 金澤の俳人一泉の少幻庵。

知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善を催すに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風

或草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中吟

あかくと日は難面つれも秋の風

小松といふ所にて

しほらしき名や小松吹く萩薄

二 錦の鎧直垂の切。

此の所太田の神社に詣づ。實盛が甲・錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝公より賜はらせ給ふとかや。げにも平士ひらぢの物にあらず。目庇まびせしより吹返しまで、菊唐草の彫りもの金かねをちりばめ、

一 越中の生れ。初め源義朝に仕へたが、後平家に随ひ加賀篠原の戦に手塚光盛の爲殺されたり。年七十三才。義仲其の首を實驗し、其の鬚髪を洗つた所皆白くなつたのを見て暗涙を催したといふ。

龍頭たつがしらに鍬形打ちたり。實盛討死の後、木曾義仲願狀ぐわんじやうにそへて此の社にこめられ侍るよし、樋口の次郎が使せし事ども、まのあたり縁記に見えたり。

むざんやな甲の下のきりくす

山中の温泉に行くほど、白根が獄あとに見なして歩む。左の山際に觀音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名づけ給ふとかや。那智・谷組の二字を分ち侍りしとぞ。奇石さまざまに、古松植ゑならべて、萱ふきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其の效有馬に次ぐと云ふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとするものは久米之助とて、いまだ小童なり。彼が父俳諧を好み、洛の貞室若輩のむかし爰に來りし比、風雅に辱しめられて、洛に歸つて貞徳の門人となつて世に知らる。功名の後、此の一村判詞の料を請けずといふ。今更昔がたりとはなりぬ。

曾良は腹を病みて、伊勢の國長島といふ所にゆかりあれば、

二 泉屋又兵衛(俳號武矩)の子。芭蕉より桃妖の號を貰つた。寶曆元年歿。

一 一隻は雙の誤か。前漢書、蘇武が別李陵詩に「雙鳧俱北飛、一鳧獨南翔」子當留斯館、我當歸故郷。

先立ちて行くに、

行きくゝて倒れふすとも萩の原 曾良

と書き置きたり。行く者の悲しみ残る者のうらみ、一隻鳧の別れて雲に迷ふがごとし。予も亦、

けふよりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外、全昌寺といふ寺に泊る。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此の寺に泊りて、

終宵よもすがら秋風きくや裏の山

と残す。一夜のへだて千里に同じ。吾も秋風を聞きつ、衆寮しゆうしやうに臥せば、曙の空近う、讀經聲すまゝに、鐘板かね鳴つて食堂じきだうに入る。けふは越前の國へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙・硯を抱へ、階のもとまで追ひ來る。折ふし庭中の柳散

二 禪宗にて修業僧の寮舎
三 雲板ともいふ。屯雲形の板。主として衆僧に三度の食時を報ずるに打つ。

れば、

庭掃いて出づるや寺に散る柳
取りあへぬさまして草鞋ながら書き捨つ。

越前の境、吉崎の入江を舟に棹して、汐ごしの松を尋ぬ。

終宵嵐に波をはこばせて

月を垂れたる汐越の松 西行

此の一首にて數景盡きたり。若し一辯を加ふるものは、無用の指を立つるがごとし。

丸岡天龍寺の長老、古きちなみあれば尋ぬ。又金澤の北枝といふ者、かりそめに見送りて此處まで慕ひ來る。所々の風景過ぎ思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞ゆ。今既に別のぞみて、

物書いて扇引きさく餘波かな
五十丁山に入つて永平寺を禮す。道元禪師の御寺なり。邦畿千里を避けて、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴き故ありとかや。

一 北潟湖。

二 吉崎の對岸濱坂の南一帶の松をいふ。此の歌山家集に見えず。蓮如上人の作とも云ふ。

三 莊子、駢拇篇に

「駢_二於足_一者連_二無用之肉_一也、枝_二於手_一者、樹_二無用之指_一也。」

四 立_二氏、金澤の刀磨で、芭蕉の門人。

五 後深草院の建長五年の創建。曹洞宗の本山。

一 福井の連歌師櫻井元輔の門人、俳號は菰景と云ふ。

二 源氏物語、夕顔の巻の夕顔の宿の風情をいふ。

福井は三里ばかりなれば、夕飯^{ゆふけ}した、めて出づるに、たそがれの路たどたどし。爰に等裁といふ古き隱士あり。いづれの年にか江戸に來りて予を尋ぬ。遙か十とせあまりなり。いかに老いさらぼひてあるにや、將死^{はた}にけるにやと、人に尋ね侍れば、いまだ存命して、そこくと教ふ。市中ひそかに引き入りて、あやしの小家に夕顔・へちまの這ひかゝりて、鶏頭・箒木に戸ぼそを隠す。さては此の内にこそと門を叩けば、佗しげなる女の出で、「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは此のあたり何がしと云ふもの、方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へ」といふ。かれが妻なるべしと知らる。昔物語にこそかゝる風情は侍れと、やがて尋ね逢ひて、其の家に二夜泊りて、名月は敦賀の湊にと旅立つ。等裁も共に送らんと、裾をかしうからげて、路

の枝折しをりとうかれ立つ。漸く白根が嶽かくれて、比那ひなが嵩顯たけはる。あさむつの橋を渡りて、玉江の蘆は穂に出でにけり。鶯の關を過ぎて、湯尾ゆの峠をこゆれば、燧が城・歸山かへるに初雁を聞きて、十日の夕暮敦賀の津に宿をもとむ。其の夜月殊に晴れたり。「明日の夜も斯くあるべきにや」と云へば、「越路のならひ猶明夜の陰晴はかりがたし」と、あるじに酒すゝめられて、氣比けいの明神に夜參よまかりす。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて、松の木の間にもり入りたる、おまへの白砂霜を敷けるが如し。往昔むかし遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、泥滓をかわかせて、參詣往來の煩なし。古例今に絶えず、神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申し侍ると、亭主の語りける。

一 官幣大社。仲哀天皇の御廟といふは誤である。

二 氣比神社の附近は毒龍の栖める沼池であつたのを、二世他阿遊行上人僧尼と共に土砂を運んで埋めたとの事。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日亭主の詞にたがはず雨降る。

名月や北國日和さだめなき

十六日空霽れたれば、ますほの小貝こいひろはんと種いづの濱に舟を走はす。海上七里あり。天屋てんや何がしといふもの、破籠やぶかご・小竹筒こたけなどこまやかにしたゝめさせ、僕あたま舟に取りのせて、追風時の間に吹きつけぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、佗たしき法華寺あり。こゝに茶を飲み酒をあたゝめて、夕暮の淋しさ感に堪へたり。

寂しさや須磨に勝ちたる濱の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵

其の日のあらし、等裁に筆をとらせて寺に残す。露通つゆも此の

一 貝の一種。山家集「汐染むるますほの小貝拾ふとて色の濱とはいふにやあるらん」。

二 天屋太兵衛、敦賀の廻船問屋。

三 普通、路通と書く美濃の人。享保初年大阪で歿。芭蕉門人。

- 一 越智氏、名古屋に住す。享保年中歿。八十餘歳蕉門十哲の一人。
- 二 近藤氏、大垣の藩士。
- 三 津田氏、大垣の人。
- 四 宮崎氏、大垣藩士。子とは此筋、千川、文鳥の三子といふ。
- 五 二十一年目毎の改築の遷座式。

- 六 一名、澁笠の銘。
- 七 攝津國箕面勝尾寺の僧。光仁の朝同寺の觀音像刻む傳未詳。徒然草に「よき細工は少し鈍き刀を使ふといふ。妙觀が刀はいたく立たず」

湊まで出でむかひて、美濃の國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合ひ、越人も馬をとばせて、如行が家に入り集まる。前川子、^三荊口父子、^四其の外親しき人々日夜とぶらひて、蘇生の者に逢ふがごとく、且つ悦び且ついたはる。旅の物うさもいまだ止まざるに、長月六日なれば、伊勢の遷宮拜まんと又舟に乗りて、

蛤のふた見にわかれ行く秋ぞ

笠張の說

草の扉に獨り侘びて、秋風寂しきをりく、竹取のたくみにならひ、^七妙觀が刀をかりて、みづから竹を割り、竹を削りて、笠作りの翁と名乗る。心靜かならざれば日をふるに物うく、^{たくみ}工つ

- 一 蘇東坡。
- 二 古今集の東歌に「御侍御傘と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」。
- 三 閩僧可土が送僧詩に「鉢即生涯隨緣度、^二歲華笠重吳天雪、^三鞋香楚地花云云」。
- 四 飯尾氏、種玉庵又自然齋と號す。紀伊の人。新筑波集を選ぶ。連歌中興の祖と仰がる。文龜二年箱根湯本にて歿。年八十二。述懐の句に「世にふるは更に時雨の宿かな」。

たなければ夜を盡して成らず。旦に紙を重ね、夕べに干して、またかさねく、澁といふ物をもて色をさはし、ますく堅からん事をおもふ。廿日過ぐる程にこそや、いできにけれ。其の形うらの方にまき入り、外さまに吹きかへりなど、^{ほすのは}荷葉の半ば開くるに似て、なかくをかしき姿なり。さらばすみがねのいみじからんより、ゆがみながら愛しつべし。西行法師の富士見笠か、東坡居士が雪見笠か、^二宮城野の露に供つれねば、^三吳天の雪に杖をや曳かん。霰にさそひ、時雨にかたぶけ、そるるにめで殊に興ず。輿の内にして俄に感ずる事あり。ふた、び宗祇の時雨ならでも、假のやどりに袂をうるほして、みづから笠の裏に書きつけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

芭蕉を移す辭

菊は東籬に榮え、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非ありて、世塵に汚さる。荷葉は平地に立たず、水清からざれば花咲かず。いづれの年にや、栖を此の境にうつす時、芭蕉一もとを植う。風土芭蕉のこゝろにや適ひけん、數株莖を備へ、其の葉茂り重なりて庭をせばめ、萱が軒端も隠るゝばかりなり。人呼んで草菴の名とす。舊友・門人ともに愛して、芽をかき、根を分ちて、所々におくる事年々になん成りぬ。一とせみちのくの行脚思ひ立て、芭蕉庵すでに破んとすれば、かれは籬の隣に地を更へて、あたり近き人々に霜の覆ひ、風のかこひなど頼み置きて、はかなき筆のすさみにも書き残し、松はひとりになりぬべきに

一「元祿二年の「奥の細道」の旅行。

二「前出

やと、遠き旅寐の胸にたゝまり、人々の別れ、芭蕉の名殘、一方ならぬ佗しさも、終に三とせの春秋を過して、再び芭蕉に涙をそゝぐ。ことし五月の半ば、花橋のにはひもさすがに遠からざれば、人々の契も昔にかはらず。猶此のあたりえ立ちさらで、舊き菴もやゝ近う、三間の茅屋つぎくしう、杉の柱いと清げに削りなし、竹の枝折戸やすらかに、よし垣あつうしわたし、南に向ひ池に臨んで水樓となす。地は富士に對して、柴門景をすゝめてなゝめなり。浙江の潮、三股の淀に湛へて、月を見るたよりよろしければ、初月の夕より、雲をいとひ雨をくるしむ。名月のよそほひにとて、先づ芭蕉を移す。其の葉廣うして琴を覆ふに足れり。或は半ば吹き折れて、鳳鳥の尾を痛ましめ、青扇やぶれて風を悲しむ。たま〜花咲くも花やかならず。莖太

一 莊子、人間世に「匠石之齊、見之樸社樹、其大蔽牛、擊之百圍、其高臨山、十仞而後有枝、以爲舟則沈、以爲棺槨則速腐、以爲器則速毀、是不材之木也、無所可用、故能若是之壽。」

二 懷素貧にして紙を紙の代用にしたといふことだ。

三 張横渠の詩に「芭蕉心盡展新枝、新卷新心暗已隨、願學新心養新德、旋隨新葉起新知。」

四 地名。眞言宗岩間山正法寺あり、西國巡禮十二番の礼所。

五 山の中腹。

六 唯一神道の家に

けれども斧にあたらず。かの山中不材の類木にたぐへてその性よし。僧懷素は是に筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て、修學の力とせしとなり。予その二つをとらず。たゞこの陰に遊びて、風雨に破れやすきを愛す。

幻住庵の記

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たゞせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなる事を、兩部光をやはらげ利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日比は人の詣でざりければ、いとゞ神さび物靜かなる傍に、住み捨てし草の戸あり。蓬・根笹

て吉田家をいふ。七 本地と垂跡、和光同塵。

一 曲水の父定澄の兄、菅沼修理定知にて、法名、幻住宗仁居士といふ。

二 後、曲翠、名は定常、膳所藩士本多八郎左衛門。享保二年同藩の奸臣曾我權太夫を刺して自盡した勇士。

三 深川芭蕉庵に移つたのは延寶八年冬、或は翌天和元年。元祿三年まで大凡十年。

四 四十七歳に當る五 古歌に「養蟲の養や失せけむ雨の夜をちよははけよと鳴きあかしめる。魏志に「焦先字孝然、結草處於河間、號蝸牛盧、呻吟其中。」

軒をかこみ、屋根もり壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云ふ。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり。予又市中を去ること十年ばかりにして、五十年や、近き身は、養蟲の養を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなご歩みぐるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂ふ。鳩の浮巢の流れとゞまるべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端茨きあらため、垣根結びそへなむどして、卯月の初めいと假初に入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。さすがに春の名残も遠からず、躑躅咲き残り山藤松にかゝりて、時鳥しばし過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、木つゝきのつゝくとも厭はじなどそゞろに興じ

- 六 元祿二年の奥の細道の旅をさす。
- 七 元祿三年。
- 八 山家集「吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん」
- 九 燕をいふ。西行の作と傳ふる歌に「山をわけ花を尋ねて日はくれぬ宿かし鳥の聲もかすみて」。
- 一 杜甫の登「岳陽樓」に「昔聞洞庭水今上岳陽樓」吳楚東南拆、乾坤日夜浮。
- 二 孔子家語に「南風之薰兮可以解吾民愠兮」。又唐太宗の詩に、薰風自南來殿閣生微涼。
- 三 〇一名近江富士
- 四 猿丸大夫の古跡あり。
- 五 萬葉集には此の

て、魂吳楚東南に走り、身は湘瀟洞庭に立つ。山は未申にそば
 だち、人家よき程に隔り、南薰峯よりおろし、北風海を浸して
 涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あ
 り橋あり、釣たる、船あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に
 早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水鶏のた、く音、美景物と
 して足らずといふ事なし。中にも三上山は士峯の梯にかよひて、
 武藏野の古きすみかも思ひいでられ、田上山に古人をかぞふ。
 さ、ほが嶽、千丈が峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいとく
 ろう茂りて、網代守るにぞとよみけん萬葉集の姿なりけり。猶
 眺望くまなからんと後の峯に這ひのぼり、松の棚づくり、藁の
 圓座を敷きて猿の腰掛と名づく。彼の海棠に巢をいとなみ、主簿
 峯に庵を結べる王翁・徐佞が徒にはあらず。唯睡癖山民となつ

- 歌なし。古歌に、
「田上や黒津の庄の瘦男あじろ守るとて色の黒さよ」
- 六 山谷集の「徐老海棠巢上、王翁主薄峯庵」の註に、「徐老樂道隱於藥肆中、家有海棠數株、結巢其上、時與客飲其間。又王道人參禪四方、歸結屋於主薄峯上、嘗有毛人至其間問道」。一 嶋に通ず、山の聳つ様をいふ。蘇軾の句に「攝衣歩屣顔」。王子瑞の句に「門前剝啄定佳客、簷外髣髴皆好山」。
- 二 石林詩話に「青山捫風坐、黃鳥挾書眠」。
- 三 西行の歌と傳ふるに「とくくと

て、扉顔に足をなげ出し、空山に虱を捫つて坐す。たまくと心
 まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくくの雫を佗
 びて、一爐の備へいとかるし。はた昔住みけん人の、殊に心高
 く住みなし侍りてたくみ置きける物ずきもなし。持佛一間を隔
 てて、夜の物をさむべき處などいさ、かしつらへり。さるを
 筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、このたび
 洛にのぼりいまぞかりけるを、或人をして額を乞ふ。いとやす
 くと筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。頓て草庵の記念と
 なしぬ。すべて山居といひ旅寝といひ、ちる器たくはふべくも
 なし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に掛けたり。
 晝は稀々とぶらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里のを
 のこども入り來りて、あの上の、の稻くひあらし、兎の豆畑にか

おつる岩間の蒼清水波みほすまでもなきすまひかなによる。
 四一賀茂の祠官藤木甲斐守教直の子、一知僧正、高良山蓮臺院。教直は書家、其の流を加茂流又は甲斐流といふ。
 五一教直の門人、芭蕉の書道師たる北向雲竹か。
 一古文前集、朱晦菴、谷雜詠に「野人載酒來、農談日西夕」。
 二一莊子、齊物論、一罔兩問、景曰、曩子行、今子止、曩子坐、今子起、何其無持操與。註に「罔兩、景外之微陰也。又影邊之淡也。」
 三一惠禪師の語錄に「二十而窺佛籬祖室」。

よふなど、我が聞きしらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取つては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず。や、病身人に倦んで世を厭ひし人に似たり。つらく年月の移りこし、拙き身の科を思ふに、一たびは仕官懸命の地をうらやみ、ある時は佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと思ひ捨て、臥しぬ。

先づたのむ椎の木もあり夏木立

四一白樂天、思舊に「泊三丹田」。
 一詩役五臟神、酒五一李白、獻贈杜市「飯顆山頭逢卓午、借問別來太瘦生、總爲從前作」。

嵯峨日記

六「詩苦」。
 六一西行の歌に「ならびて友をはなれぬ小雀のねぐらに頼む椎の下枝」。

一 向井氏、肥前國長崎の人。蕉門十哲の一人。寶永元年五十四歿。
 二 號は春花園、加賀の人。正徳四年歿。

元祿四辛未卯月十八日、嵯峨に遊びて、去來が落柿舎に至る。凡兆共に來りて、暮に及びて京に歸る。予は尙ほ暫くと、むべきよしにて、障子つゞくり、葎引きかなぐり、舎中の片隅一間なる所伏所と定む。

- 机一ツ 硯 文庫 白氏文集
- 本朝一人一首 世繼物語 源氏物語 土佐日記
- 松葉集を置く。

唐の蒔繪書きたる五重の器に、さまざまの菓子を盛り、名酒一壺、盃そへたり。
 夜の衾、調菜の物共、京より持ち來りて貧しからず。我

貧賤を忘れて、清閑に樂む。

十九日、午半臨川寺に詣づ。

大井川前に流れて、嵐山右に高く、松の尾の里につゞけり。虚空藏に詣づる人往きかひ多し。松の尾の林の中に、小督屋敷と云ふ有り。都て上下の嵯峨に三所あり。何れか確ならん。彼の仲國が駒とめたる所とて、駒留の橋と云ふ此のあたりに侍れば、暫く是によるべきにや。墓は三軒屋の隣、藪の内に有り。標しるしに櫻を植ゑたり。かしこくも錦繡綾羅の上に起臥して、終に藪中の塵芥となれり。照君村の柳、巫女廟の花の昔思ひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪の茂りや風の筋

斜日に及んで落柿舎に歸る。凡北京より來る。去來京に歸る。

一 小督は櫻町中納言の女で高倉院の寵幸を専らにしたが、中宮は平清盛の息女であつたので清盛の怒りに觸れて嵯峨に隠れた。院は非敷限りなく彈正大弼仲國をして其の行方を尋ねしめ、再び宮中に召還されたが、清盛の爲再び放たれた。時に年二十三。小督の墓、駒留橋など傳ふるもの渡月橋の附近にある。詳しくは平家物語、諸曲小督に出づ。二 漢の王昭君が匈奴の單于に嫁した

宵より臥す。

廿日、北嵯峨の祭見んと、羽紅尼來る。去來途中の吟とて語る。

つかみあふ子供の長や麥畑

落柿舎は昔の主の作れるまゝにして處々頽破す。中々に作りみが、れたる昔のさまより、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁畫に、壁も風に破れ雨にぬれて、奇石怪松も律の下にかくれたる。竹椽の前に柚の木一本花芳しければ、

柚の花にむかし忍ばん料理の間

子規大竹藪をものる月夜

またやみん覆盆子あからめ嵯峨の山 尼、羽紅

去來兄の方より菓子調菜の物など送りて、今宵は羽紅夫婦をとゞめて、蚊屋一はりに五人こぞり臥したれば、夜もいねがたく

故事、西京雜記に詳しく出てゐる。李白の詩に「昭君拂玉鞍、上馬啼。紅顏今日漢宮人、明朝胡地妾。」三 楚の襄王夢に巫山の神女と會して之を幸し、彼の爲め廟を建てた故事文選、宋玉の高唐賦に「昔者先王嘗游高唐、怠而晝寢夢見一婦人曰妾巫山之女爲高唐之客、聞君游高唐、願薦枕席、王因幸之、去而辭曰妾在巫山之陽、高丘之岨、旦爲行云暮爲行雨、朝朝暮暮陽臺之下、且朝視之、如言、故爲立廟、號謂朝雲。」一 野澤凡鳥の妻、名はとめ、京都の人。二 三井秋風。(前

出

て、夜半過よりも各起き出でて、晝の菓子盆など取り出して、
曉近きまで話し明す。去年の夏凡兆が宅に臥したるに、二疊の
蚊屋に四ヶ國の人臥したり。思ふ事四つにして、夢もまた四種
と、書き捨てたる事どもなど云ひ出して笑ひぬ。明くれば羽紅
凡兆京にかへる。去來尙ほとゞまる。

廿一日、

昨夜いねざりければ心むづかしく、空のけしきも昨日に似ず、
朝よりうち曇り、雨をりく音信れば、終日眠り臥したり。暮
に及びて去來京に歸る。今夜は人もなく、晝臥したれば夜も寝
られぬまゝに、幻住庵にて書きすてたる反故を尋ね出して、慰
みに清書。

廿二日、

朝の間雨降る。今日人もなく、淋しきまゝにむだ書して遊ぶ。

其の言、

喪に居る者は悲をあるじとし、
酒をのむ者は閑をあるじとす。
愁に住する者は愁をあるじとし、
徒然に住する者は徒然を主とす。
哀に住するものは哀をあるじとす。
淋しさなくばうからましと西上人のよみ侍るは、淋しさがある
じなるべし。又よめる、

山里にこはまた誰をよぶこ鳥獨すまんと思ひしものを
獨すむ程面白きはなし。長嘯隱士の曰く、客は半日の閑を得れば
主は半日の閑を失ふと。素堂常に此の言葉を憐れむ。予もまた、

一 豊臣秀吉の臣。若狭國主となつたが後徳川氏に追はれ、京都東山靈山に隠れ、和歌を友として世を送つた。慶安三年八十一歳歿。舉白集がある。
二 東城と佛印の唱和の句に、
「因、
過三竹院逢僧語上
又得浮生半日閑」
東坡
「學士閑了半日閑」
老僧忙了半日閑
佛印

一川井氏、智月尼の子、近江國大津の人。寶永年中歿

うき我を淋しがらせよかんこ鳥
とは、或寺に獨居て云ひし句也。

暮方去來より消息す。乙州が武江より歸り侍るとて、朋友・門人の消息どもあまた届く。其中曲水が狀に、予がすみすてし芭蕉の舊跡尋ねて、宗波に逢ふよし。

むかし誰小鍋洗ひしすみれ草

(以下省略)

二一名、許六離別の詞。
三元祿五年。

柴門の辭

去年の秋、かり初に面をあはせ、ことし五月のはじめ、深切に別を惜しむ。其の別にのぞみて、ひと日草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其の器、畫を好み風雅を愛す。予こゝろみに問

一論語、子罕篇、「吾少也賤、故多能鄙事。君子多乎哉、不多也。」

二論衡、「作無益之能、納無補之說、獨如以夏進爐以冬奏扇、亦徒耳。」

三藤原俊成の法名、後鳥羽院御口傳「釋阿はやさしく艶に心も深く哀なる所もありき。特に愚意に庶幾する姿也。西行はおもしらくて、而も心も特に深く、哀なるありがたく出で來がたき方も大

ふ事あり、畫は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其の學ぶ事二つにして、用をなす事一なり。まことや君子は多能を恥づといへれば、品二つにして用一なる事感ずべきにや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども、師が畫は精神微に入り、筆端妙をふるふ。其の幽遠なる處予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用ふる所なし。たゞ釋阿・西行のことばのみ、かり初にいひ散らされし仇なるたはぶれごとも、哀なる處おほし。後鳥羽上皇の書かせ給ひしものにも、これらは歌に實ありてしかもかなしびを添ふると、の給ひ侍りしとかや。されば此の御言葉を力として、其の細き一すぢをたどり失ふ事なかれ。猶「古人の跡を求めず、古人の求

に相兼ねて見ゆ。生得の歌人とおばゆ。
五―空海、性靈集、「書亦以擬古意爲善、不以似古迹爲巧」。

一―空海。南山は高野山。比叡山を北嶺といふに對す。

二―一名、悼嵐。蘭詞嵐蘭は通稱又五郎肥前島原の城主板倉侯の臣、主家没落して浪人し、江戸に住す。元祿二年四十七没。

三―中庸、「枉金革死而不厭、北方之強也」。

四―論語、雍也篇、「質勝文則野、文勝質則史。文質彬彬、然後君子」。

五―元祿六年。

めたる所を求めよ」と、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて、燈をかゝげて柴門の外に送りて別るのみ。

嵐蘭の詠

金革をしきねにして敢へてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は、義を骨にして實を膈にし、老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間に遊ばしむ。予ちなむ事十とせあまり九とせにや。此の三とせばかり、官を辭して岩洞に先賢の跡を慕ふといへども、老母を荷なひ、稚子をほだしとして、未だ世波を出でず。されども榮辱の境に居らず日々風雲に坐して、^五ことし仲秋中の三日、由井・金澤の波の枕に

一―晋書、王戎傳に斐然、王戎の目を見て我眼爛々如巖下電。
二―源氏物語奥入「あ時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人は戀しかりける」。

月をそふとて、鎌倉に杖を曳き、其の歸るさより心地なやましうして、終に息絶えぬ。二十七日の夜の事にや。七十年の母に先だち、七歳の稚子におもひを残す。いまだ惜しむべき齡の五十に足らず、公の爲には腹押切りても悔ゆまじき器^{うつはもの}の、はかなき秋風に吹きしをれて、草の袂のいかに露けくも口惜しうあるべきと、今はの時の心さへ知られて悲しきに、母の恨はらかなの嘆、親しきかざりは傳へ聞きて、ひとへに親屬の別に同じ。ことし陸月の末ばかりに、稚子が手を取り予が草庵に來りて、彼に號得さすべきよしを乞ふ。王戎五歳の眼ざしうるはしければ、戎の一字を缺きて嵐戎と名づく。その悦べる色今日のあたりを去らず。生ける時むつまじからぬをだに、^二なくてぞ人はとしのばるゝ習ひ、まして父の如く、子の如く、手の如く、足の如

一 杜甫、春日憶李白、渭北春天樹、山東日暮雲。から着想したのだらう。杜は渭北に、白は江東に居たので、友人相憶ふことを暮雲春樹又は渭樹江雲といふ。

二 桑の俗字桑を分つと四十八となるので、四十八歳を桑年といふ。

く、年比なれむつびたる佛の、愁の袂にむすぼ、れて、枕も浮きぬべきばかり也。筆を取つて思ひをのべんとすれば才拙く、いはんとすれば胸ふさがりて、只おしまづきにかゝりて夕の雲に向ふのみ。

秋風に折れてかなしき桑の杖

書簡集

一 甲子吟行に出てゐる。

草枕月をかさねて露命恙もなく、今ほど歸庵に赴き、尾陽熱田に足を休むる間、ある人我に告げて、圓覺寺大巖和尚とし睦月のはじめ、月まだほの暗きほど、梅の匂ひに和して遷化し給ふよし、こまやかに聞え侍る。旅といひ、無常といひ、悲しさいふ限りなく、折節の便りにまかせ先づ一翰投机、右而已。

梅戀ひて卯花拜むなみだかな

四月五日

はせを

其角雅生



然ば御約束の水鶏笛送給忝珍重存候。此の里の人々聞馴れず、

女子ども集まり、我を藝者の様に申しをかしく候。行脚さき、
 國ところにより、一向音を知らぬ人御座候間、吹いてきかせ可
 申と悦び申候。鹿笛も木曾より貰ひ申候。ほととぎす笛も御座
 候はば、ほしきものに候。水鶏笛作る人は作るべくと存候。乍
 御面倒是も御聞き可被下候。出来候はば、御頼可被下と頼入申
 候。何にても相應望のもの、細工人へ御禮可致候。殺生の道具
 ながら、水鶏鹿笛も只吹くはをかしく候。初雁はつかりの聲、水鶏たた
 くななど、歌にも發句にも作る人の、さし竿にてとり、網にかけな
 ど致候は口と心と相違にて、名句吐き候とも、うそつきといふ
 ものに候へば、まことの風人から見れば、あはれなる事にて、
 たとへ殺さずとても、雲に飛び地に走り候ふ鳥を、小さき籠に
 入れ、樂となすは、牢番も同じ事にて候を心付かず、籠を列べ、

一 唐の雅陶、和孫
 明府懷舊山詩よ
 「五柳先生本在山、
 偶然爲客落三人
 間、秋來見月多
 歸思、自起開籠
 放白鷗」。
 二 服部保英、通稱
 半左衛門、伊賀國
 上野の人、享保十
 五年七十四歿。

これは二兩の駒鳥也、これは五兩の鶯なりといひて、摺餌すりごに小
 袖の肌おし脱ぎ、高祿の人にもあさましき様する人、武林連中
 には有るものに候。かの「開籠放白鷗」の詩意など、教訓可
 被成下候。伊賀の家中の人々にも御座候間、土芳つちらにも此事度々
 申遣候。

うぐひすや餅に糞する縁の先

二月十六日

芭蕉庵

一 笑 様

又武士は殺生するものなりと云ふ人御座候へ共、魚鳥を捕り候
 が腕かためにも成り申すまじく候。只心のいやしき故に候。そ
 れぐの獵師御座候間、これより買ひ求め、料理候事は罪にあ
 るまじく候。

三 小林味頼、通稱
 茶屋新七、加賀國
 金澤の人、元祿元
 年三十六歿。

一 本名は廣瀬源之丞、濃國、關の人、芭蕉に特に親近して居た。正徳元年歿。

昨日は漉紙澤山御惠辱存候。然處昨夜惟然一宿例のむだ書、剩筆の先棒になし困入申候。今四五枚申請度候。此人に御こし可被下候。

七日

はせを

杉風丈



一 一書には一升。

新麥一斗、筆二本、油のやうな酒五升といふは富貴の沙汰なり、蕎麥粉一重、小遣錢二百文忝存參らせ候。

(本書には宛名見當らず)

はせを

水油なくて寝る夜や窓の月

俳諧

猿蓑

一 芭蕉の俳諧七部集の一つで、元祿三四年の交に成る。蕉風圓熟期の代表的撰集として重んぜらる。

二 初時雨に濡れて亂れた翼を嘴で撫でつくらうさま。

三 發句の前景を附けた所謂逆附の脇句。時雨の直後の景。

四 早朝股引の濡れるのもかまはず川を徒渉する。

五 篠竹を折り曲げて仕掛けた狸威しの弓。

六 早朝股引の濡れるのもかまはず川を徒渉する。

七 篠竹を折り曲げて仕掛けた狸威しの弓。

俳諧猿蓑

七五

六 横に棧を築く入
れた板戸にて玄關
等に用ゐる。これ
は荒廢した屋敷の
光景。第五句は月
の座といひ月を點
出す。
七 名物の梨がなつ
て居るが人にも呉
れず腐るままにし
てゐる。風變りの
主人公。
八 餘り上手でもな
い墨繪を得意氣に
書きちらして悠々
自適のさま。
一 ぬりやすは當時
舶來の珍貴な品で
それで作つた足袋
は肌さはりもよく
雅人等の喜んで穿
いたもの。
二 前句の人物の悠
々自適の心境。
三 里近くなる午の
時刻を知らせる法
螺貝が聞える。
四 晝寢に古い垢染

みた蓮を敷いて寢
る田家の有様。
五 木芙蓉は秋花を
開くのでこは蓮
花であらう。
六 水前寺は水前寺
海苔の略稱で、熊
本近在の水前寺で
出来る海苔の一種
七 結構な水前寺の
吸物を御馳走にな
つてゐるが歸路が
三里もあるので多
少氣がせく。
八 廬同は唐の茶人
玉川子と號す。そ
の下男が出代りせ
ず奉公してゐる。
九 下男の挿した木
がついて芽を出し
隠者の庭の富める
さま。
一〇 苔のついた手
水鉢を並べて落ち
ついた氣分。
一 今朝の腹立ちが
何時の間にか周囲
の氣分で自然に直

は 一 き心よきめりやすの足袋

何 二 事も無言の中は靜かなり

里 三 見えそめて午の貝吹く

ほ 四 つれたる去年の寢蓆のしたたる

芙 五 蓉の花のはらくと散る

吸 六 物はまづ出來されし水前寺

三 七 里あまりの道かかへける

此 八 の春も廬同が男居なりにて

さ 九 し木つきたる月の朧夜

苔 一〇 ながら花に並ぶる手水鉢

蕉 兆 邦 來 蕉 邦 兆 蕉 來 兆

ひ 一 とり直りしけさの腹立

一 二 時に二日の物を喰うて置き

雪 三 氣に寒き島の北風

灯 四 ともしに暮るれば登る峰の寺

時 五 鳥みな啼きしまひたり

瘦 六 骨のまだ起き直る力なき

隣 七 をかりて車引き込む

憂 八 き人を枳殻垣よりくぐらせん

今 九 や別れの刀さし出す

せ 一〇 はしげに櫛で頭をかき散らし

兆 來 蕉 兆 邦 蕉 來 邦 兆 來

つた。
 二立腹して物を食
 はなかつたが機嫌
 が直つて一度に二
 日分平げてしまつ
 た。
 三島は雪模様でお
 まけに寒い北風な
 ので島へ渡る前に
 十分腹をこしらへ
 る。
 四日が暮れると峰
 の寺に燈明つけに
 登る。
 五何時の間にか時
 鳥も啼きじまひに
 なつた淋しい木の
 下道を登るさま。
 六春先きからの長
 患にすつかり弱つ
 てしまつて、もう
 時鳥の聲も聞かれ
 なくなつたが未だ
 起上れない。
 七隣の人を力を借
 りて車を引きこむ
 八内所に入れて會
 つた戀人を表から

出されずにかた
 ちの垣の間をくぐ
 らせて出す。
 九いよ／＼別れに
 差迫つて女が男の
 刀を渡す。
 一〇男との別れに
 いら／＼して髪を
 かきみだすさま。
 討死の覺悟物凄
 く頭髪ふり亂して
 奮戦するさまを敵
 も味方も手本にせ
 よ。
 一一夜の明け方討死
 の屍體を前にして
 物語るさま。
 一二澄み渡つた有明
 の空にくつきりと
 見える比良の山に
 は初霜がおり、一
 入湖水の秋が感じ
 られる。
 三澄惠僧都が隣家
 の島の蕎麥を盗ま
 れたを聞いてよん
 だ歌一盗人は長袴
 をや著たるらんそ

思ひ切つたる死に狂ひ見よ
 青天に有明月の朝ぼらけ
 湖水の秋の比良の初霜
 柴の戸や蕎麥盗まれて歌をよむ
 布子着習ふ風の夕ぐれ
 押し合うて寝ては又たつ假枕
 たたらの雲のまだ赤き空
 かまへ鞆つくる窓の花
 枇杷の古葉に木の萌芽え立つ
 去來九 芭蕉九 凡兆九 史邦九

邦 兆 來 蕉 兆 邦 蕉 來 邦

俳句

蓬萊に聞かばや伊勢の初便
 春立つや新年ふくべ米五升
 梅が香にのつと日の出る山路かな
 紅梅や見ぬ戀作る玉簾
 落ちざまに水こぼしけり花椿
 古池や蛙飛びこむ水の音
 おとろへや齒に喰ひあてし海苔の砂

ばをとりてぞ走り
去りぬる」から翻
案したもの。盗ま
れてしまつてから
今更腹も立たない
四―うすら寒い夕方
の風に着馴れぬ綿
入を出して着てみ
る。

五―ゆつくり寝着く
ことも出来ず寺か
田舎の宿で押し合
つて過し起きると
六―又旅立つて行く。
使ふたはは鑄物に
焼の空にふいがう
の火影が見える時
刻。

七―一構立派な屋敷
であつて窓際に花
が咲いてゐる。そ
の花のかけでは鞆
を作つてゐる。
八―窓前の庭には枇
杷の古木があつて
若い芽を吹き出し
てゐる。

春雨や蜂の巢つたふ屋根の漏り
かれ芝やまだかげろふの一二寸
草臥れて宿かる頃や藤の花

伊勢山田

何の木の花とは知らず匂かな

花の雲鐘は上野か淺草か

高野

父母のしきりに戀し雉子の聲

臍 峠 多武峯より龍門へ
越ゆる道也

雲雀より上に休らふ峠かな

旅行

一つぬいで後に負ひぬ更衣

ほととぎす聲横たふや水の上

わが宿は蚊の小さきを馳走かな

五月雨の雲吹き落せ大井川

清瀧や波に散りこむ青松葉

稻妻や闇のかたゆく五位の聲

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月
短夜や驛路の鈴の耳につく
菊の香や奈良には古き佛達
ひいと啼く尻聲悲し夜の鹿
名月や門にさし來る潮がしら
水油無くて寝る夜や窓の月

堅田にて

病む雁の夜寒に落ちて旅寝哉
吹きとばす石は淺間の野分哉

深川の庵にて

芭蕉野分して鹽に雨を聽く夜哉
枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
旅人とわが名呼ばれん初時雨

伊賀へ歸る山中にて

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり
蓑蟲の音を聞きに來よ草の庵
旅寢して見しやうき世の煤拂
鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店
生きながら一つに氷る海鼠かな
雁さわぐ鳥羽の田面や寒の雨
葱白く洗ひ上げたる寒さかな
米買に雪の袋や投頭巾

舊里や臍の緒に泣く歳の暮

ここに草鞋を解きかしこに杖を捨て
旅寢ながらに年の暮れければ

年暮れぬ笠着て草鞋はきながら

病中吟

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

行脚の掟

- 一、一宿なすとも故なきに再宿すべからず。樹下石上に臥すとも温めたる筵と思ふべし。
- 一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず。總て物の命を取る事勿れ。
- 一、君父の讎ある處には、門外にも遊ぶべからず。俱に天を戴かざる忍びざる情あれば也。
- 一、衣類・器財相應にすべし。過ぎたるはよからず。足らざるもしからず。程あるべし。
- 一、魚・鳥・獸の肉を好んで食ふべからず。美味・珍食に耽ける人は他事にふれやすきものなり。菜根を咬んで百事をなすべき語を思ふべし。
- 一、人の求なきに、己が句を出すべからず。望みを背くもしからず。問はざるに説くは説くにあらず。問ふに答へざるは宜しからず。

一、たとひ嶮岨の境たりとも所勞の念を起すべからず。發らば中途より歸るべし。

一、馬・駕に乗る事なかれ。一枝の枯枝を己が瘦脚と思ふべし。

一、好んで酒を飲むべからず。饗應により固辭しがたくとも、微醺にして止むべし。亂に及ばずの禁有り。祀歳の戒祭に醅を用ゐるも酔へるを憎めばなり。酒に遠ざかるの訓あり。慎むべき事也。

一、船錢・茶代忘るべからず。

一、他の短をあげて己が長を顯はす事なかれ。人を謗つて己にはこるは甚だ賤し。

一、俳談の外雑話すべからず。雑話出でなば、居眠りして勞を養ふべし。

一、女性の俳友に親しむべからず。師にも弟子にもいらぬ事也。此の道に親養せば人をもて傳ふべし。總て男女の道は嗣を立つるのみ也。流蕩すれば心敦一ならず。此の道は主一無適にして成す。能く己を省るべし。

べし。

一、主あるものは一枝・一草たりとも取るべからず。山川・江澤にも主あり勤めよや。

一、山川・舊跡親しく尋ね入るべし。新たに私の名を付くる事なかれ。

一、一字の恩師たりとも忘るることなかれ。一句の理をだに解せず人の師となる事なかれ。人に教ふるは己を成して後の事なり。

一、一宿・一飯の主もおろそかに思ふべからず。さりやとて媚び諂ふ事なかれ。かくの如き人は世の奴也。此の道に入る者は此の道の人に交るべし。

一、夕を思ひ旦を思ふべし。且暮の行脚といふ事は好まざる事也。人に勞を懸くる事なかれ。しばしすれば疎せらるるの言を思ふべし。はた飽食たりとも好むべからず。

右の條々我が門の行脚は慎むべき也。當時を見るに、かくの如きの掟

を守つて行脚する俳客一人もなし。不相應に美を飾り、利欲の爲に偽を言つて世を渡る、淺ましからずや。或は古人の名を賣り、自己の勝手のよきやうに言ひ散らすは、誠に羊頭をかけて狗肉を賣るの徒にして、切賣の功者といふべし。

祖翁口訣

- 一、格に入つて格を出でざる時は狭く、又格に入らざる時は邪路にはしる。格に入り格を出でて、始めて自在を得べし。詩歌・文章を味はひ、心を向上の一路に遊び、作を四海にめぐらすべし。
- 一、千歳不易、一時流行。
- 一、他門の句は彩色の如し。我が門の句は墨繪の如くすべし。折にふれては彩色のなきにしもあらず。心他門にかはりて、さび・しをりを第一とす。

一、伊勢の俳人、中川乙由の子夢浪の所持せしものにて芭蕉の遺語なりといふ。芭蕉一代の遺稿を集めたる一葉集(文政十年刊)に出づ。

一、名人は地をよく調ふべし。折にふれては危き處に妙あり。上手は強き所に面白味あり。

一、類似の句をいふ。
二、「初懷紙」ともいふ。

- 一、等類・作例第一に吟味すべし。
- 一、古書・撰集に眼をさらすべし。
- 一、我が門の風流を學ぶ輩は先づ鶴の歩みの百韻・冬の日・春の日・猿蓑・ひさご・曠野・炭俵等を熟覽すべし。發句は時代々々を考ふべし。
- 一、初心のうちには句數を求むべし。それより姿情をわかち、大山を越えて向ふの麓へ下る所を案すべし。六尺を越えんと欲するものはまさに七尺を望むべし。されば心高き時は邪路に入りやすからん。心卑き時は古人の胸中を知る事能はず。
- 一、俳諧は中人以下のものと誤れるは、俗談平話とのみ覺えたる故なり。俗談平話を正さんが爲なり。拙きことばかりを云ふを俳諧と覺えたるは淺ましき事なり。俳諧は萬葉集の心なり。されば貴となく、賤とな

く味はふべき道なり。唐・明すべて中華の豪傑にも愧づる事なし。只心の賤しきを恥とす。

一、てにをば専ら要なり。我が國はてにをば第一の國なれば、先哲の作を味はひ、一字も疵末なることなかるべし。句の姿は青柳の小雨に垂れたるが如くにして、折々微風にあやなすも悪しからず。情は心裏に花を眺め、真如の月を觀すべし。附心は薄月夜に梅の匂へるが如くあるべし。

校註芭蕉選集完

昭和九年十月十日印刷
昭和九年十月二十日發行

校註芭蕉選集

定價金五拾錢

編者 鈴木周作

東京市神田區神保町三丁目十三番地

發行者 奥村銀松

東京市神田區錦町三丁目五番地

印刷者 太田米吉

版權所有

發行所

東京市神田區神保町三丁目十三番
振替東京三一六五七番

白帝社

電話九段(33)一〇七五番

發賣所

大阪市東區北久太郎町
振替大阪二三一一番

柳原書店

終

